

## V おわりに

情報バラエティーは、またその制作者たちは、いま、難しいところにいる。

いつの時代にも、意外性のある情報、目新しい事実はそれなりにある。しかし、それらを便利に探せるインターネットが普及したものの、そこには真偽の定かでない情報も、誹謗や中傷も、客観情報を装った宣伝も、自己顕示や誇張された情報も大量に混じっている。何より、そうした情報・事実をおもしろくしゃべり、演じてくれる人たちも増えてきて、彼や彼女たちのなかには情報の正確さや事実の公正さなどより、テレビに出ること、出演して自分自身や自分が扱っている商品をアピールすることに価値を見出したり、おもしろがったりする人もいる。

そんな危なっかしい情報環境のもとで、情報バラエティーは作られ、制作者たちが仕事をしている。

「ネットの動画とテレビは同じ。コンテンツを作るという意味では、ネットもテレビもちがいはない」

ヒアリングのなかで、そう語った若手スタッフもいた。制作会社のなかには、ネット用素材と放送用素材の両方を制作しているところもあった。

それはちがうだろう、という根拠はどれだけあるか。確かに制作物を公共の電波に乗せるか、通信回線を用いて私的に送受信するかの相違があり、それぞれ配慮すべき事柄が根本的にちがうと言うことはできるが、若い制作スタッフがなかなか学ぶ機会を持ってない、バラバラの制作体制にあっては、果たしてこれが説得力を持つかどうかは疑わしい。

ここで大事なものは、番組を企画し、制作を采配する制作幹部たちの求心力である。彼らが番組の狙いやイメージを鮮烈に打ち出し、取り上げる情報や事実を手堅く構成し、多くのスタッフを力強く引っ張っていかないことには、情報バラエティーはネットにあふれる不確かな情報を右から左に流すだけの拡声器に墮してしまう。

今回のヒアリングでとくに耳に残ったのは、制作幹部たちがしばしば使う「テレビ的に」という言いまわしだった。「テレビ的にはこういう映像がほしい」「テレビ的にはおいしい画だ」「テレビ的には許される」等々だが、これはわかるようでわからない、どのようにも勝手に解釈できる言葉である。

制作幹部たちの口からこういう言いまわしが頻発する制作現場に、情報の正確さや事実の公正さより、映像の奇抜さやインパクトを優先する風潮はなかっただろうか。若手スタッフがこの曖昧な言葉を我流に解釈し、上司の期待に応えようとした傾向はなかったか。いや、何より制作幹部たち自身が「テレビ的に」と考えるあまり、情報・事実の正確さを究めることに鈍感になっていなかっただろうか。

委員会は上述したような現代情報環境の危うさを念頭に置きながら、シンプルに、

簡単なことだけを言っておきたい——情報バラエティーを作るときは、情報や事実の取り扱い方の基本にかえること、これである。

さて、このあとは、「若きテレビ制作者への手紙」を読んでいただきたい。いま情報バラエティーを作っている若い制作者たちこそ、子供の頃からインターネットになじみ、危ういところの少なくない現代の情報環境のただなかを生きてきた最初の世代であろう。彼や彼女たちが情報の正確さや事実の公正さに敏感になり、意識的になることが情報バラエティーそのものだけでなく、現代の情報環境の質を高めることにも寄与するにちがいない。私たちはそう信じている。

この「手紙」には、若い制作者に寄せる私たちの大きな期待が込められている。